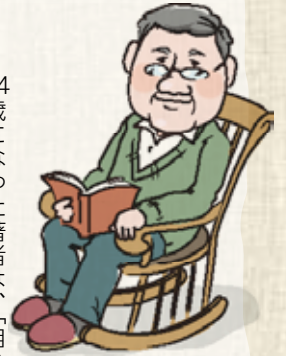


# 「罽撃ち」



著者：久保俊治  
発行：小学館  
ISBN：9784093878401  
2009年4月20日発売 ￥1,785



24歳になった著者は、「自分の手で罽獵犬を育ててみたい」という夢を実行に移します。罽獵に使われるアイヌ犬は体が大きくて気が荒い、獐猛なオス犬が一般的でしたが、著者は体の小さな、俊敏で優しく、繊細で粘り強い、メスのアイヌ犬が罽獵にふさわしいと考えました。熟考の末、選り出した犬にアイヌ語で「火の神」の意味を持つ「フチ」という名前を付けます。そして訓練を重ねるに連れて「フチこそ一生に一度会えるかどうかという犬だ」という確信を深めていきます。生後10カ月でのシカ獵がフチの初陣となりますが、深追いしすぎて危うく迷子になります。学習能力の高いフチは、しばらくするとシカの牡・牝の区別をつけられるようになり、禁獵ではない牡シカだけを、飼主がライフルを構えて待機している場所に追いつまむ事が出来るようになり、「頭がやっとなるほどの深い雪の中を、半刻も休みなく走り続けて追い、それを山の中の一点に追いつくことの苦しさを」といったら、並大抵のことではない。走った距離は10キロ以上にも及ぶだろう。それは思うだけでも凄まじいことである。フチ自身も、私に対して全幅の

信頼を寄せてくれていることがわかる。」もう一つ罽獵の場面から「赤土の中から、威嚇の声とともに罽の頭が飛び出す。フチはパッと身をかわし、すかさずその鼻に接するような近さで吠えつく。罽の頭が根元に、消えるように見えなくなる。根元に窪みがあり、その窪みに身を低くひそめてしまったのだ。間近まで近づいて、やっとそのことがわかった。窪みから、威嚇の声とともに現れる罽の姿。口の紅さ、剥き出しになったクリーム色の牙、鼻に寄せた皺までがはっきりと見える。・・・中略・・・私の五メートルほどの目前で、小さいフチが、何十倍もある罽と対等に戦っている。罽獵犬として育て、夢にまで見た場面がまさに目の前で繰り広げられている。フチの気迫のこもった吠え声、藪の中での身ごなし、相手の反撃がないと思えば鼻先に接するようにして吠えつく大胆さ、その駆け引きの沈着さ。心の中でフチに声援を送りながらしばし見つめる。見守る。気がつく、フチ頑張れ、いけ、いけと大きな声で叫んでいた。本来ならば決して声を出すべきでない。しかしフチの見事な駆け引きは、山での禁を破らせるほどに心を揺さぶる光景であった。」そんな充実したフチとの獵を中断してまでも、著者はアメリカでプロハンターになる夢を実現するために渡米する道を選ぶのです。